WESLEYAN HOLINESS SEMINARY
神学院だより
2022年6月
第77号

〒111-0052
東京都台東区柳橋2-22-3
ウェスレアン・ホーリネス神学院
☎ 03-3851-3762
FAX 03-3851-3858
振替口座番号 00130-4-364534
名義 ウェスレアン・ホーリネス神学院

発行人　山崎　忍
編集人　文カンホ、後藤貴子
印刷所　ヨベル

神学と伝道する
信徒を育てる神学院

神学院教授　川崎　豊

石地の地、祖国

今日日本の教会の宣教が進まない理由は種々考えられます。物質的豊さが宗教的救いを求めなくさせている。90年代に起こったオウム真理教の無差別殺害事件によって、宗教を持つことの恐ろしさが強く広がったため。更に古くから汎神論的精神風土に染まって来た日本人にキリスト教の一神教が他宗教を偶像とみなし国家、民族間に争いを生む要因を作り出していると説く哲学者もいます。

しかしこういうことだけを理由にしてはならないと思います。それ以前に教会が本気で宣教して来ただろうかと問わなければならないと思います。

福音を伝える足は麗しい

私が中学生の頃（60年代後半）、地方の教会に通っていましたが、多くの中高生が一般礼拝や中高生会に集っていました。教会とはどのようなところなのか、聖書には何が書いてあるのか読んでみたいという人がいました。そして中高生会、青年会を作り、新聞発行や聖書通読会をしたことを覚えています。故にその頃私は教会の前途は明るいと思っていました。

そして私は講壇から福音を力強く語る牧師を素晴らしい仕事をしている人だと尊敬と憧れの眼で見ていました。しかし自分はそのような器ではないと思っていました。

しかし18歳の時、「……わたしは語る言葉を知りません。わたしは若者にすぎませんから。しかし、主はわたしに言われた。「若者にすぎないと言ってはならない。わたしがあなたを、だれのところへ遣わそうとも、行ってわたしが命じることをすべて語れ。彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて、必ず救い出す」（エレミヤ1・6～8）の御言葉に捕らえられ聖書学校に入学しました。劣等感の強い者でありましたが主は一つ一つ取り扱ってくださいました。そして伝道生涯54年となりました。

伝道者として振返って

私の伝道者生涯を振返ってみました。困難と絶望の淵に陥った経験もしました。一方こんな奇跡と御業を見せていただいた私は幸せだと思うこともしばしばあります。そしてこの恵みの福音をどのように人々に伝えられるだろうかと思いめぐらしてきました。

同時に、伝道者として教会の教師として信徒の一人一人を初代教会の使徒たちのように福音を伝える器に育ててくることが出来ただろうかと、自問しています。私は淀橋教会で奉仕をしていました時、韓国のサラン教会が実施している「弟子訓練による教会形成」について学ぶ機会が与えられました。二度も韓国に行って研修の時を持たせていただきました。そして確信したことは、牧師は福音を語るが、本業は福音を語ることのできる信徒を育てることだということでした。そして福音を語る人（リーダー）は謙遜に仕える人（サーバント）でなければならないということでした。それを複数の教会で試みてきました。しかしその精神は受け継いでいますが

第33回ウェスレアン・ホーリネス神学院　卒業式(2022年)

実態として実は結んでいません。そして今もT&M（弟子化）の学びのグループに所属して実現を目指して学んでいます。しかし時間と体力の無さに困難さを感じています。

牧師の一本釣り伝道も大切です。個人伝道は伝道の基本ですから。しかし牧師は一本釣り伝道の出来る信徒を育てることが大切だということを今更のように思う次第です。日本の風土において、特に地方において教会は教会に飛び込んで来る人に伝道するだけではやがて消滅します。その地においてなくてならない心の支えとなる教会に育てなければなりません。そのためには、地域に仕え、言葉と仕事を通して福音を語ることを本業とする、という意識を持った信徒を育てることが大切だと思うのです。

初代教会に学ぶ

初代教会がどうしてあのように多くの人々が救われ教会の交わりに加えられたのでしょうか。一言でいうなら、彼らは本気で伝道したからでした。その本気度はどこに見られるでしょうか。それは迫害に会えば会うほど聖霊に励まされて福音を伝えることをやめなかったことです。使徒言行録19章20節に見ることが出来ます。

初代教会では今のような神学校はありませんでした。しかし信徒たちは使徒達が出会った復活の主に同じく出会って変えられたのでした。そのように変えられた人たちが今度は主イエスの福音を伝える人になっていきました。つまり自分を変えてくださった復活の主を信じる信仰の凄さを語る人に変えられたのです。福音を語ることが本業となったのです。そして学業に従事することも仕事もアルバイトも家事も子育ても副業となったのです。副業だから手を抜いた訳ではありません。仕事を通しても主から与えられた仕事として誠実に果たしていったのです。これは言葉でなく態度による宣教と言えます。

主の願いを反芻したい。「私についてきなさい。人間を取る漁師にしよう」（マタイ4・19）

◆卒業生の証し◆

新しい任地に遣わされて

卒業生　岡　聖志

「先にあったことを思い起こすな。昔のことを考えるな。見よ、私は新しいことを行う。今や、それは起ころうとしている。あなたがたはそれを知らないのか。確かに、私は荒れ野に道を　荒れ地に川を置く。」（イザヤ43・18―19）

今年3月に神学院を卒業し、4月から伝道師として、東京都墨田区にある向島キリスト教会へと遣わされました。当然のことではありますが、1日の流れも、置かれている立場も、求められている役割も、神学生の時とは全く違うのだということを実感しています。正直に申し上げれば、自分が最低限すべき奉仕をなんとかこなそうとしているうちに、あっという間に1ヶ月が過ぎてしまったような印象です。しかし、これから神様がどんなことを用意してくださっているのかを考えると、期待に胸が膨らみます。新しい生活に慣れることは簡単ではありませんが、日々、神様の恵みのうちに守られていること、本当に感謝です。

4年生の聖日派遣先と同じ教会で仕えることとなり、1年間お世話になった方々と、さらに深く交わる恵みが与えられています。またそれだけでなく、この4月からは、訪問等を通して聖日に来ることのできない方々ともお会いし、共に祈ることができるようになりました。創立98年を数えるこの教会で、信仰の先輩方がどのようにその信仰を守り、教会を建て上げ、次の世代へと受け継いで来られたのか、多くのことを学ばせていただいています。

コロナ禍の中ですが、時折新し

い方が来られ、その内何名かは続けて来てくださるようになりました。また、日曜学校の子どもたちが成長し、受洗を志願する子どもたちも起こされています。それぞれ悩みを抱えつつも、神様の導きによって少しずつ前進しておられる姿に、とても励まされています。私にできることは何か、まだ手探りのような状態ではありますが、魂の救いのために祈りつつ、私にできる精一杯のことをしていけたらと思っています。

イースターを終えてからは、新たに早天祈祷会も開始しました。毎週火曜日から金曜日、対面とZoomとを併用して行うことになりました。多い時で7名ほどの方が集い、毎朝共に賛美し、共に祈って1日を始めています。それぞれの場所に遣わされる前に、まず共に集い、祈ってから出発することができることは、本当に幸いなことだと思います。私にとっても、毎朝の奨励を準備するのは大変ではありますが、良い訓練の時となっています。祈りによって教会が導かれるよう、また祈りによって私自身も整えられたいと願っています。

まだ遣わされて1ヶ月ですが、このように振り返ってみると、本当にたくさんの恵みが与えられていることに気づかされます。しかし、それと同時に、自分の弱さ、足りなさに直面させられる日々でもあります。それでも伝道師として立つことを許され、主のなされる救いのご計画の一端を担わせていただけることは、本当に感謝なことです。み言葉に仕える畏れと喜びとを持って、今後も主を見上げつつ進んでいきたいと思います。続けてお祈りをいただければ幸いです。これを読んでおられる皆様の上にも、神様の豊かな祝福と守りがありますようお祈りいたします。

新しい歩み

卒業生　船津悠大

「私は柔和で心のへりくだった者だから、私の軛を負い、私に学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に安らぎが得られる。私の軛は負いやすく、私の荷は軽いからである。」（マタイによる福音書11・29―30）

いつもお祈りとお支えありがとうございます。3月で神学院を卒業し、4月から境の谷めぐみ教会に伝道師として派遣されました船津悠大です。神学院での学びと新しい地での働きについて証させていただきます。

4月からの境の谷めぐみ教会では、第2週に主任牧師である湯澤宣道先生がいらしてくださる聖日を除き、毎週礼拝と祈祷会の奉仕をさせていただいております。教会の頭は主イエスでありますが、教会の皆さんの日々の歩みを大きく左右する毎週の御言葉の御用を任され、身が引き締まる思いです。また、社会の中でキリストを宣証する教会として、各種の行政手続きや地域での宣教の模索、教団の働きなどがあります。神学院でぬくぬくと先生方に寄りかかり、学生たちと交わっていた時には想像していなかった様々なことを負いながら、毎日とにかく一生懸命駆け抜けております。改めて、このような主の働きを何年も担っていらっしゃる先生方の偉大さを感じました。

牧会に出てから、神学院で学んだことの中で、特に大事だったなと感じたことが2つあります。

1つ目は毎朝のデボーションです。神学院では毎朝学生や先生方と一緒に早天祈祷会を持ちます。ボーっとしていてもとにかく会場に行って身を置けば、恵みの内に1日を主と共に始めることができました。今、1人で遣わされ、この習慣にとても助けられています。時に、1人で信仰を奮い立たせ続けることが厳しい時があります。しかし、細々でも毎朝御言葉をいただいて主に祈ることで、神の恵みの内に守られ、何とかやっていくことができています。

2つ目は、御言葉に裏付けられた人間力です。学生時代の聖日派遣の最後の方で、ある信徒さんからこんな言葉を頂きました。「人の痛みが分かる牧師になってください」。主イエスは私たちと同じ人間になってこの地に来てくださいました。「それで、イエスは、神の前で憐れみ深い、忠実な大祭司となって、民の罪を宥めるために、あらゆる点できょうだいたちと同じようにならなければなりませんでした」（ヘブライ2・17）。主イエスがそうであったように、牧師も高いところから説教を

垂れるだけなく、一人のキリスト者として皆さんと心を通わす。それには、ご自分が傷つくことを良しとし、友のために命を捨てるほどの愛を示してくださった主イエスに学び、聖霊様に日々つくりかえていただく必要があります。このことは机上で一朝一夕に身に着けられるものでなく、日々の積み重ねによります。神学院の寮生活、聖日派遣では、そのような御言葉に裏付けられた人間力を学びました。身に付いたかと言えばまだまだですが。

神学院での学びを振り返って思うのは、卒業は終わりではなくスタートラインに立ったにすぎないということです。粗削りで何に使えるか知れない器のような私が主の名によって遣わされました。しかし、主の言葉は「必ず、私の望むことをなし／私が託したことを成し遂げる」と約束してくださった御方により頼みながら、主の軛を負って、主と共に歩み続けたいと思います。

◆新入生の証し◆

神学院に導かれて

1年　増渕　徹

私が教会に来るようになったのは、ある時不幸が重なったからです。離婚、会社の倒産、それに伴う経済的な損失。大きな挫折の中、生きて行くことに希望を失い死んでしまいたいと思いました。

そんなときです。クリスチャンの姉から一通の手紙が届きました。その手紙には一言だけこう書かれてありました。「あなたはひとりぼっちではない。」と。その頃私はまだ神を信じていませんでしたが、涙が止まりませんでした。そしてその手紙には、「教会に行きなさい」と、浅草橋教会の住所が添えてありました。

浅草橋教会に通うようになっても、私には肝心の「神様」が見えませんでした。どこを探しても見つかりません。私は教会を去ろうと思いました。ここにも私の居場所がなかったからです。

その時、私の腕を掴む温かな手がありました。須藤茂雄兄です。「教会てのはね、立派な人が来る所じゃないんだよ。重荷を背負った人が来る所なんだよ。あなたのままでいいんだよ。」と言ってくれました。私はその時、須藤兄の手の温もりは主イエスの温もり、優しい眼差しは主イエスの眼差しと感じました。

私が教会に来て「神様」が見えなかったのは、何かを頂くことしか考えていなかったからです。須藤兄の愛は無償の愛だったのです。私は須藤兄の言葉に救われました。

須藤兄だけではありません。黒木先生をはじめ、召された方達を含む教会の兄弟姉妹の祈り、励ましの言葉が私を救ってくれたのです。私はこの愛する神の家族の一員になりたくて、２００６年６月４日ペンテコステの日に受洗しました。

受洗の際、黒木先生から記念として聖書を頂きました。その聖書の裏表紙に御言葉が書かれてありました。「もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きることなのです。」（コリント二5・15）

私は直感的に献身への招きの言葉であると感じました。しかし、その頃の私には与えられた御言葉がとても重く感じられました。「金持ちの青年」のように私には手放せないものがたくさんあったからです。それからというもの、私は頂いた聖書を読むとき、その御言葉が目に触れないように裏表

第34回ウェスレアン・ホーリネス神学院　入学式(2022年)

紙を伏せてページを開くようにしていました。そのようなとき、次の御言葉に出逢いました。

「サウルの一生を通して、ペリシテ人との激戦が続いた。サウルは勇敢な男、戦士を見れば皆召し抱えた。」（サムエル上　14・15）

私は自分の力で生きてきたのではなく、全てを益としてくださる主に生かされてきたからこそ今の私がいるのです。

私に与えられた救いは、私だけのものにしておいてはいけない。かつての私のように真の救い主を知らず、孤独の中で苦しんでいる方たちに、この福音を伝えなくてはならない。姉をはじめとする伝道者がこの世と闘っていてくれるからこそ救われる魂が起こされていることに気が付いたのです。神の戦士の召集に応じなければならない。この決断をするまで15年の年月が経過しました。そして、60歳の定年退職の機会を逃したら二度と主の招きに応じることはできないと思い、山崎先生に胸の内をお伝えし、祈って頂き、神学院受験の申請をさせていただきました。

山崎先生をはじめ、多くの方達の祈りに支えられ、晴れて神学生になることが出来ましたことを心より感謝申し上げます。皆様の足を洗うべく献身者になれるように勉学に励む所存です。

「あなたはひとりぼっちではない。」この小さな一言から私は救われました。この小さき者のためにさらにお祈りください。

◆在校生の証し◆

キリストに倣いて

2年　細井一広

いつもお祈りいただき、ありがとうございます。主の御守りのうちに、先生方の御指導、さらに先輩方や皆様のお祈りに支えられ、無事に進級できました恵みを感謝いたします。

神学院最初の1年は、授業、奉仕、寮生活いずれも、初めてのことや慣れないことが多く、戸惑いや不安でいっぱいでした。しかし、実際に取り掛かると、不思議なように知恵や力が与えられ、何とか乗り切ることができました。これも主の恵みであり、ただ主に感謝するばかりです。

とはいえ、授業の準備や奉仕等での多忙な日々に加え、制約の多い寮生活は、献身ということを理解しているつもりでも、何か割り切れないものがありました。特に、これまで大人として責任を負いつつ行動し、判断してきたことから一転、子どものように指示され、制限される有様は、まるで囚われの身のように感じたこともありました。

しかし、神の子としての身分を捨て、十字架の死に至るまで従順に従われた主イエスこそ、誰よりも謙遜を貫かれたお方だと気付かされました（フィリピ2・6～11）。神学院生活の模範は、何よりも主イエス御自身であることに目を向けたとき、不思議と平安が与えられました。キリストに倣いつつ、神学生として、献身者として、学びや務めを全うさせていただきたいと願っております。

プライベートを含め、いろいろと先の見えない日々ではありますが、全てを主に委ね、感謝のうちに前進したく思っております。引き続き、お祈りの御支援をいただければ幸いです。

神学院での2年を振り返って

3年　松本麻椰

八潮キリスト教会でのご奉仕を終え、4月から渋谷教会に行っています。1年前は淀橋教会を離れることに正直不安もありましたが、主は八潮教会の皆様とのすばらしい教会生活を与えてくださいました。奉仕する中で、どうしよう！できない！と思うようなことも度々ありましたが、その度に聖霊の導きをいただきました。一度与えられた礼拝説教の機会には、士師記6・12「力ある勇士よ、主はあなたと共におられます。」の御言葉から、ギデオンは色々な弱さのある人でしたが、主が共にいてくださる故に力ある者とされたこと、などが示されお話しました。私自身も力のない者ですが、最強・全能の主が共におられるからできることがあると信じます。神学院生活が

すでに折り返しをしていて、上級生としてキャプテンを任せていただいていることは驚きです。学びの内容も難しくなっていますので、共におられる主にすがりつつ歩みたいです。

ところで、神学生のメンバーについて、毎年神様は最善のメンバーを備えてくださることを感じています。去年はコロナ中の夏の派遣ができない時に、卒業した岡先生が映像、舩津先生が音声と編集技術を駆使して配信作業をしてくださいました。お二人がいなければ去年のYouTube配信はできませんでした。今年は、年上の方が多くなるから、静かで落ち着いた生活になるのかなと思っていましたが、予想に反して会話や笑いが絶えない生活になっています。年齢や背景はさまざまですが、家族のようにたくさんの時間を過ごす神学生生活で、お互いを愛することを学ばせていただいています。来年度はどのようなメンバーになるのか、新入生もお祈りして待ちながら楽しみにしています

ありのままの私で

4年　黒木真菜

神学生として最後の年となりました。ここまでの学びと奉仕が守られたことに感謝します。時が経てば経つほど、自分の力に頼ることの愚かさを教えられています。共同生活では一人暮らしの何倍も、自分には余裕も愛もないことを痛感します。しかし自分には何も無いと知る時に、共におられる神様の力と愛にすがることが赦されていることを感謝しました。私は幼い頃から人の評価に自分の存在価値を見出してきた面があります。この世の価値観で固められた私の理想像が時々顔を出し、私の弱さをつけ狙ってきます。しかし、神様が創造してくださった本来の私へと変えられていく生涯が最も素晴らしいとの確信が与えられているので、その度に御言葉を握って戦っています。私が最終的に直接献身へと押し出された御言葉は、箴言16章9節「人間の心は自分の道を計画する。主が一歩一歩を備えてくださる。」です。自分の計画に惑わされて、あれもこれもと欲張らず、主が備えておられる一歩を確実に進めていきたいです。いつも主の御心を求め、神と人との前で自分を偽ることなく、正直な者となりたいです。サマリアの女が主によって変えられ、恥も何もかも捨てて用いられたように、私も用いていただきたいと願います。

「彼らは女に言った。『私たちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからである。』」（ヨハネ4・42）

この1年の訓練、健康が守られるようお祈りお願い致します。

◇◇◇

れました。オンラインで出席した教師も数名、神学校時代に与えられた尊い経験を語り、共に生涯主に仕える特権と使命の尊さを感謝しました。

学院生活と学びに関して、例年のように学院長と教務、事務長よりガイドラインが語られ、新年度を始めるにあたって心構えを確認しました。特記すべきことは、聖日派遣の報告と週番日誌が紙媒体からオンラインに代わったことでした。

当教団の基本教理である新生、聖化、神癒、再臨の四重の福音を、日本ホーリネス教団の石原潔先生が聖書学院退官記念に出版された『恵み深き主を―私たちを導く四重の福音』をテキストにして学びました。先輩諸聖徒たちが継承してきた四重の福音を正しく理解し、体験に基づいて確信をもって語れる者となるべく、思いを新たにさせられました。

愛の家は時間に制限されずにゆっくり過ごせる場所であり、心のこもった手作りの食事をいただけたことも恵みでした。二日目は、奈良井宿を訪れ、神が備えて下さった思いがけないその町の老紳士を通して、伝統を保つ宿場町の意義を学び、隠れ切支丹の信仰の証を見、霊的励ましを与えられたことも恵みでした。

◆献金のお願い◆

神学院では、毎年年会時における予約献金、神学院デー献金、また個人、団体献金に支えられ運営を続けておりますが、今年も年会が中止され予約献金をお願いができなくなり、神学院の経営に大きな支障が生じています。昨年も多くの方々の支えの中で、神学院の働きが守られましたが、今年もこの紙面を通して、予約献金のお願いをいたしますことをご理解ください。教団の将来の伝道者育成機関である神学院運営のために、更に祈り、お献げいただければ感謝です。

◆編集後記◆

神学院のためにお祈りとお支えを心から感謝します。2022年3月に2名の卒業生を送り出し、4月には1名の新入生が与えられ、新年度が始まりました。昨年と同じく今年も新型コロナウイルスの影響により、少数の教師と生徒が卒業式と入学式にあずかり、1年の恵みを感謝し、新たな歩みをゆだねつつスタートしました。その様子を神学院ホームページ、またYouTube動画を通して視聴することができます。皆様のお祈りと励ましによって喜びと恵みあふれる卒業式、入学式を執り行うことができました。

神学院は主に多数の授業を、スカイプ、ZOOMなどで行っています。新型コロナによって生まれたオンライン授業が今は大いに用いられ、遠隔地の先生方の授業も行うことができ、豊かに祝されています。万事を益としてくださる主の恵みが注がれていることを心から感謝しています。また、自粛をしていた先生方も少しずつ対面の授業を行っておられ、以前の神学院の姿が回復されているような気がします。さらに主の癒しと憐れみが、神学院に豊かにあるように祈る次第であります。そして世界情勢が不安である中、ウクライナ・ロシアに主の平和が豊かに注がれますように、どうぞ心を合わせてお祈りくだされば幸いです。

今回の神学院便り第77号では、神学院教授の川崎豊先生の巻頭言、新入生、増渕 徹神学生の証し、卒業生、岡聖志先生、舩津悠大先生の感謝の証し、在校生の新年度に向けての抱負、新川代利子先生のオリエンテーション報告、そして、献金者一覧を掲載させていただきました。

神学生は、前期授業終了、試験の後、7月の関東夏期聖会より、夏期伝道期間に入ります。今度の関東夏期聖会は、久しぶりに対面で行う予定にしていて学生たちも期待しています。神学生それぞれの霊性、健康が守られ、成長する時を過ごすように、また、派遣される諸教会に主の豊かな祝福がありますようにお祈りください。この神学院だよりを読んでいるすべての兄弟姉妹の上に主の豊かな祝福がありますようにお祈りいたします。